

中村政則

『昭和の記憶を掘り起こす
—沖繩、満州、ヒロシマ、ナガサキの極限状況—』

(小学館、二〇〇八年)

人見 佐知子



本書の主意は、「オーラル・ヒストリーを通じて、歴史学(日本現代史)の再構築を図」(一二頁)ることに尽きる。

著者がオーラル・ヒストリーに関心をもちはじめたのは、一九七〇年代の初めのことである。と記されているが、一般に歴史学におけるオーラル・ヒストリーの「信頼性」は低い。皇国史観への反省から出発した戦後歴史学は、「実証性」に重きを置き、それを担保するものとして文書史料・考古学的(物的)史料に価値を置いてきた。一方で、口頭の史料は、他の物証や文書史料の裏付けがあつてはじめて史料的价值を得るものとされ、文書史料の二次的・副次的な位置づけしか与えられてこなかった。実証史学とは、文書史料中心主義と言い換えてもよい。「史料」の序列化がそこにはあつた。

戦後歴史学における文書史料中心主義が最も先鋭に批判にさらされた「事件」として記憶に新しいのは、「慰安婦」問題

である⁽¹⁾。「慰安婦」問題が、戦後歴史学のあり方につぎつぎと核心的な問いのひとつが、「慰安婦」の「証言」の客観性・中立性・信憑性であつた。すなわち、実証性の名において特権化された文書史料にたいするオーラル・ヒストリーの挑戦が、そこにはあつた。「慰安婦」問題によってひき起こされた歴史学の方法論についての論争は、歴史認識論にまで発展し、幾人かの歴史学者の応答を経て、いったん収束した⁽²⁾。

それから約一〇年を経て出された本書は、そのときの論争については触れていないが⁽³⁾、著者独自の長年の実践からオーラル・ヒストリーの方法を吟味し、その成果を中間報告的にまとめた歴史学(とりわけ口述史が可能な近現代史)への提言の書といえるだろう。

著者はまず、歴史学においていまだ「市民権」を得ていないがたいオーラル・ヒストリーについて、オーラル・ヒストリーとは何かを定義しようと試みる。著者によれば、オーラル・ヒストリーには三つの段階がある。第一に、「聞き取り」である。聞き取りとは文字通り、話し手の体験、記憶などを聞き取ることである。第二に、「聞き書き」である。これは、聞き取りの時点ではあいまいな年月日やばらばらな話の内容を整理し、「資料化」する作業である。この資料化された聞き書きをもとに歴史叙述を行うのが、著者のいう「オーラル・ヒストリー」である。ただし、「資料化」の作業はそう簡単ではない。概要をいえば、①語りをそのまま忠実に再現する《直接再現型》、②ほとんどを聞き手(著作者)の地の文章にして叙述する《間接叙述型》、③聞き手(著者)が話し手

の語りを地の文に挿入する方法《混合型》に分けられる。現時点では、対象とする内容、伝えるべき内容によって最も適切な方法を見極める、というのが著者の立場のようだ。ちなみに、本書は③の立場をとっている。

つぎに著者は、オーラル・ヒストリーの有効性について述べている。オーラル・ヒストリーがとりわけ効力を発揮するのは、歴史的事実と社会的事実が異なる場合である。歴史的事実とは物的証拠(文書史料)と言い換えてもよいだろう。文書史料に残らない(社会的事実)を立証しようとするときのオーラル・ヒストリーの有用性は、本書がしかと明らかにしている。

しかし、単に聞き取った内容を証拠として採用することは、もちろんよしとしない。たとえば、聞き取り、聞き書き、オーラル・ヒストリーの各段階で、「証言」が全体の社会構造のなかでどこに位置するかを確かめることは重要である。つまり、語り手が村落指導部(一般住民とは異なる情報入手が可能な立場)か一般住民かで「証言」の内容は大きく異なってくる。詳しくは、本書を読んでいただきたいが、これはイギリスのオーラル・ヒストリー研究では「constellation 星座、位置」といわれ、オーラル・ヒストリーを行う際には一般的に用いられる基本的な手法であるという。この事実だけでも、日本のオーラル・ヒストリーの方法論がいかに未確立であるかがわかるだろう。

本書は、三部構成となっている。第一部は、沖縄戦を生き抜いた人々について、第二部は、満州移民について、第三部は、

ヒロシマ・ナガサキの被爆者のオーラル・ヒストリーである。いずれも(極限状況)のオーラル・ヒストリーである。なぜ、著者が(極限状況)にこだわったかについては、後で述べる。

著者の人生経験と豊富な知識を基盤とするこれらのオーラル・ヒストリーは、いずれも得難い緊張感に満ちていて、文字史料だけでは知ることの出来ないさまざまな個別の体験と、個別の体験ゆえの生彩ある歴史の細部をえぐりだす。それはまるで、著者の聞き取りを再体験するようでもある。そのあたりは是非体感して欲しいので、評者が下手に要約するような野暮はしないでいきたい。

終章で著者は、自らの実践を経た結果得た独自のオーラル・ヒストリーの方法について、留意すべき点を述べている。論点は多岐にわたるが、評者が普段おこなっている聞き取り調査において直面する問題でもあり、それゆえに示唆をうけた点について、とくととりあげて述べてみたい。

それは、「語り手と聞き手の関係」である。著者は記す。「話し手は聞き手の年齢や職業あるいは『知りたがっていること』を敏感に察知して話をすすめるものである」(二七二頁)と。本書で取り上げられている多くの事例は、やはり著者が著者であるがゆえに可能であったのだろうと思わされる部分が多い。そして、著者自身もそれに自覚的である。この問題の解決方法について著者は明示していないが(そもそも解決しようのない種類の問題であるかもしれないが)、オーラル・ヒストリーとは、語り手と聞き手の共同作業であり、両者の信頼関係を前提とした、「人間の全存在をかけたコミュニケーション

ンの一形態」(一二三頁)であるという大胆な提言は傾聴に値する。オーラル・ヒストリーとは、語り手の人生を引き受けるということなのだ。そうした覚悟なしにオーラル・ヒストリーはなしえない。

それに関連して本書の特徴をもうひとつあげるとするならば、「貫戦史(trans-war history)」の考え方を「歴史叙述の方法として本格的に用いた」(一八頁)ことである。あるものには、「貫戦期(trans-war era)」⁽⁴⁾という言葉のほうが馴染みがあるかもしれない。より具体的には太平洋戦争から敗戦(一九四五年八月一日)にいたる過程だけを日本現代史における戦争とみなすのではなく、第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして大戦後を貫く歴史の連続性を重視する態度をいう⁽⁵⁾。すなわち、ある人間の体験を戦争だけに特化して描くのではなく、戦時体験と戦後体験を一体として連続的に描く歴史叙述の方法である。

そうなると、オーラル・ヒストリーは必然的にライフ・ヒストリーとなる。著者が〈極限状況〉にこだわった理由もここにある。すなわち、戦争という〈極限状況〉にたまたま込まれた人々が、その体験の悲惨さ、無念さを述べるにとどまらず、そこからいかにして立ち直り、人間としての尊厳を回復していったか、そのライフ・ヒストリーを描くために著者は、オーラル・ヒストリーの対象として〈極限状況〉を体験した人々に向き合うことを選択した。

かく、オーラル・ヒストリーについての「覚悟」やその厳しさについて述べてきたが、本書の意図は、もちろん、オー

ラル・ヒストリーのすすめにある。オーラル・ヒストリーのもつ重圧を自覚したうえで、「未知の人に会い、未知の話聞き、驚きと感動に震える」、文献中心の歴史学では味わうことのできない「喜び」(二七六頁)を多くの人と共有したいという思いから本書は生まれた。

日本においてはオーラル・ヒストリーの確固たる方法論の未だ存在しないことはすでに述べた。著者が本書を上梓した目的のひとつは、オーラル・ヒストリー上の諸問題について「皆さんと一緒に考えていきたい」(二六四頁)という点にある。最初に本書を歴史学への提言の書と評したのも、著者のかかる意図を汲んでのことである。ゆえに本書は、著者の経験にもとづくオーラル・ヒストリーの可能性や魅力と同時にその配慮すべき点、留意点などについても委細に述べている。

現在自治体史の編纂などを中心に、「聞き取り」は徐々に行われつつある。二〇〇三年には、日本でもオーラル・ヒストリー学会が発足した。しかし、そもそもオーラル・ヒストリーとは何か、何をオーラル・ヒストリーと呼ぶべきかについての合意がないままそれが行われているのが現状である。それらの問題も含めて「オーラル・ヒストリー」の内容と方法論について実践を並行させつつ吟味していくことが、本書を受け取ったわれわれの課題である。

注

(1) その代表的な言説は、上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』(青

土社、一九九八）である。

(2) かかる一連の論争を総括する論文として、上野輝将『ポスト構造主義』と歴史学——『従軍慰安婦』問題をめぐる上野千鶴子・吉見義明論争を素材に——、『日本史研究』五〇九、二〇〇五年一月がある。

(3) 『慰安婦』問題を端を発した実証に基礎をおく戦後歴史学の方法をめぐる議論に、著者は積極的ではなかったように思う。それは、著者自身のオーラル・ヒストリーに対する確信がすでにそのときにあったからに違いないと、本書を手にとって推測する次第である。

(4) Gordon, Andrew, *A Modern History of Japan*, Oxford University Press, 2004 (マントル・ゴードン『日本の二〇〇年』森谷文昭訳、みすず書房、二〇〇七年)。

(5) 野上元『戦争体験の社会学——「兵士」という文体』(弘文堂、二〇〇六年)も、戦争体験を分析する視角として類似の内容を提起している。参照されたい。

(ひとみ さちこ・日本近代史)